これからの図書館
Future Library

これからの図書館を考える③

愛知工業大学教授
中井 孝幸

1967年大阪府生まれ。
1991年三重大学工学部建築学科卒業、1993年同大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了、1993年三重大学工学部建築学科助手、2000年博士(工学) 三重大学。2001年安井建築設計事務所名古屋事務所、2005年INA新建築研究所名古屋支店を経て、2006年愛知工業大学講師、2008年同准教授、2016年同教授、現在に至る。
2005年より日本図書館協会図書館施設委員会委員。

著書は、『よい図書館施設をつくる』(日本図書館協会)、『公共図書館運営の新たな動向』(勉誠出版)、『図書館施設論』(日本図書館協会)など。

設計活動は、珠洲市民図書館・すずキッズランド(図書施設学識アドバイザー)、立誠図書館(家具デザイン)など。

“「にぎわい」のある多機能融合型の図書館(複合施設)”

はじめに

国からの要請を受け、2014年以降に全国の各自治体では、公共施設等総合管理計画を策定し、所轄する公共施設の現況把握、長期的な視点から総量規制、財政負担の軽減が進められてきた。そうした中、図書館を含む公共施設の再編、複合化した多機能融合型の図書館の整備が、主に中心市街地の活性化を目指して行われている。日本図書館協会図書館施設委員会の新しい図書館の整備状況に関する調査[1]によると、複合施設が2018年72%、2019年度94%、2020年度77%、2021年度は85%、4年間の平均で81%となるなど、地域に限らず最近の新しい図書館は、複合施設の占める割合が高くなっている。

今後も計画が増えるであろう図書館を含む複合施設が単なる「合築」ではなく、単独館では現れない施設サービスへの需要が掘り起こされ、今まで利用してこなかった人たちにも、施設利用のきっかけを与えることができる「多機能融合型」の図書館づくりについて考察したい。

図書館を含む複合施設の利用状況

今まで、地方都市部の図書館を含む複合施設において、図書館利用者はもちろんのこと、複合施設利用者も対象にした調査研究をいくつか行ってきた。ここでは、図書館を含む複合施設の事例紹介も兼ねて、図書館や施設全体に対して土曜日一日に行った来館者アンケート調査、館内のどこでどのように利用者が滞在して利用しているのかを捉えた行動観察調査の結果も併せて、4館報告する。

1) 塩尻市市民交流センター「えんぱーく」(塩尻市立図書館)

えんぱーくの外観

長野県塩尻市の中心市街地の大門商店街に面した「えんぱーく」は、図書館、子育て支援・青少年交流、シニア活動支援、ビジネス支援、市民活動支援の5つの重点分野が複合した市街地再開発ビルで2010年7月に開館し、塩尻市立図書館の中央館でもある。壁柱で支えられた4つの大きな吹き抜けを持ち、上階に商工会議所や一般企業のオフィス、歯科クリニック、音楽練習室、1階に飲食店が入る複合建築物である。施設全体の9割を市が所有し、共用部分も含めて施設機能が全体的にゆるやかにつながっている[2]。駐車場は、道路を挟んだ市営駐車場が6時間無料。

子育て支援センターと児童開架のデスク(えんぱーく)

半屋外空間のシビックテラス(i-ビル)

児童開架室の横に子育て支援センターがあり、公民館機能のあるフロアには市民が自由に利用できるフリースペースが用意され、いくつかの機能が図書館と連携してサービスを提供している。図書館は1、2階で、BDSにより図書館ゾーンは区画されているが、壁やガラスによる仕切りはなく、3階までは全体的に図書館のような雰囲気である。共用空間のフリーコミュニティや市民サロンでは、イベントやグループでの打ち合わせをはじめ、友人たちとの勉強や囲碁、パソコンなど様々な活動が行われていた[3]。

2) 尾張一宮駅前ビル「i-ビル」(一宮市立中央図書館)

i-ビルの外観

愛知県の一宮市立中央図書館は、JR尾張一宮駅に隣接し、ホールや商業施設、子育て支援センターなどが複合する7階建ての尾張一宮駅前ビル「i-ビル」内に計画され、2013年1月に開館した。駐車場は図書館利用者が1時間無料で、以降は30分で100円ずつ課金される。貸出登録の制限はすべて撤廃し、事実上全国どこからでも登録が可能。駅に隣接し、街づくりの視点からも施設全体のにぎわい創出が期待されており、駅のコンコースと同じ高さにある3層吹き抜けの半屋外の共有空間の「シビックテラス」は、イベント時や平時もよく利用されている。

シビックテラスや図書館内にある学習室は非常に人気だが、車の利用者率は塩尻の65%に対して40%と少ない。過去の他館の利用状況と比較してみると、主婦層が少なく、その結果、主婦層との同伴が多い児童層の利用も減少してしまう。これは、おそらく駐車場の料金設定がその原因で、地方都市の中央館クラスでは駅前でも、長時間無料の駐車台数を確保するべきである。また、i-ビルの複合相手の施設種も多く、各施設機能が部署ごとに区画されており、複合施設全体として他の機能との連携は少ない状況となっていた[3]。

3) 市民交流プラザふくちやま「ききょう」(福知山市立図書館中央館)

市民交流プラザふくちやまの外観

京都府の福知山駅前のロータリーに面して立地し、1、2階に中央図書館、3階は会議室やギャラリー、4階は中央公民館機能、子育て支援、ハローワークなどの機能との複合施設で、2014年6月に開館した。図書館とエントランスホールの共用部は、1階の自動ドアで仕切られている。図書館機能

エントランスのカフェ(ふくちやま)

1) 日本図書館協会編:第43回図書館建築研修会(2022年度), よい図書館をつくる−多機能融合型の図書館を考える, 日本図書館協会, pp.10-24, 2023.2
2) 今井正次、櫻井康宏編著、明石行生、中井孝幸、大月淳、吉田伸治著、柳澤忠監修:『設計力を育てる建築計画100選』、共立出版、2015 .4
3) 丹羽一将、渡邉裕二、中井孝幸他:「場」としての図書館計画に関する研究その1、その2、日本建築学会東海支部研究報告集、第52号、pp.533-536、pp.537-540、2014.2
4) 村瀬久志、中井孝幸:図書館を含む複合施設の機能の立体的なつながりからみた利用者の活動の場所選択−複合施設における居場所形成からみた「場」としての図書館に関する研究その2、地域施設計画研究36、日本建築学会、pp.169-176、2018.7
5) 村瀬久志,中井孝幸:図書館を含む複合施設における平面構成と利用者属性からみた居場所形成−複合施設における居場所形成からみた「場」としての図書館に関する研究その1、地域施設計画研究35、日本建築学会、pp.187-194、2017.7
6) 中井孝幸、川島宏、柳瀬寛夫:『JLA図書館情報学テキストシリーズⅢ、12 図書館施設論』、日本図書館協会、2020.3

と3階以上にある施設機能とは直接つながっていないため、図書館内から3、4階へ直接上がることはできず、1階で一旦図書館を出てから、3、4階へ上がる動線となっている。

このように、市民交流プラザは各機能のセクションが厳格に分けられているので、1、2階の図書館と3、4階の公民館部分で直接行き来ができず、残念ながら一度1階へ降りて、共用部から入り直す必要がある。そのためか、利用者の属性分布の様子も各階で大きく偏りが見られた[4]。各施設や自治体の考え方にもよるが、複合施設ならば様々な世代の利用者層が、もう少し混ざり合った方がよいと思われる。

4) 安城市中心市街地拠点施設「アンフォーレ」(安城市図書情報館)

アンフォーレの外観

愛知県安城市のアンフォーレは、JR安城駅から約400m離れた旧病院移転跡地に、図書情報館とホールがある本館、スーパーとカルチャーセンターのある南館、その間の立体駐車場を含む複合施設で、PFI事業と定期借地権事業との一体的な実施により、2017年6月に開館している。本館の地下1階はホール、1階はエントランス、証明・旅券窓口センター、地ビールが飲めるカフェ、多目的室、2～4階が図書情報館となっている。2階は新聞雑誌と児童開架があるため、NPO法人が運営する子育て支援施設、3階にはビジネス支援のコーナーが隣接している。

ユニークなのが、エントランスのフリースペースは10円／㎡で利用できるため、出店やマルシェなど市民が自由にフロアを借りて活動し、4層吹き抜けのため施設全体に「にぎわい」のある空間となっている。開館当初は、全フロア飲食OKであったが、コロナ禍では食事は控えてもらっているとのこと。立体駐車場からは2階の出入り口でつながっており、吹き抜けに面した回り階段もよく利用され、2～4階の各図書館フロアに様々な利用者層の人たちが偏りなく滞在している[5]。

4層吹き抜けのエントランスホール(アンフォーレ)

多機能融合型の図書館の利用状況

1) 複合施設におけるついで利用

複合施設での調査では、施設全体の利用者にもアンケートを配布するが、約8割の来館者が図書館を利用している。そのうち、ついで利用は15%程度である。複合施設として計画すると、相乗効果で図書館利用が急増するのではないかと期待されるが、実際には同日に2つの施設機能を使う人は非常に少ない。よい図書館施設をつくらないと、ついで利用で利用者が増えることはないといえる。

一方、塩尻のえんぱーくは、壁やガラスで各機能が仕切られておらず、ゆるやかにつながっているため、図書館を含むついで利用が約3割と他の施設に比べて高くなっていた[2]。ついで利用の割合は、このように建物のつくり方で変わるかもしれないが、これは今後の研究課題でもある。

2)「にぎわい」のまちへの展開

近年、複合施設の中に「カフェ」への要望が高くなっているが、開館して数年後に訪問すると、店舗が変わっていたり、閉じていることも多い。新しく図書館ができれば、一日で数千人が来館することもあるが、利用者の滞在時間は20～30分が多く、平均滞在時間も60分程度と利用者の入れ替えの回転が早い[6]。滞在型利用として、滞在時間を長く伸ばすことだけが目標ではないが、多様な利用や様々な活動を図書館で展開してもらうために、工夫が必要となる。

また、調査した図書館や複合施設で職員の方々から話を聞くと、新しく施設ができて、非常にたくさんの利用者が来場しているが、そうした利用者が建物周辺の街や地域へ、広がっていないとの声をよく耳にする。過去の調査でも、図書館を利用した当日、複合施設内や建物周辺で購買したかどうかをアンケートで尋ねたことがあるが、購買した利用者は非常に少なかった。

このように、新しく施設自体にできた新しい人流をいかに周辺や地域へ広げるかも、建築空間のつくり方と同じく大きな課題であるといえる。